

News Letter

— 特 別 号 —

2022.8



弁護士

井口 寛 司

I g u c h i H i r o s h i

1 9 6 2 - 2 0 2 2



弁護士法人 神戸シティ法律事務所

原 点

1994年2月1日、弁護士1人で独立開業しました。しかし、独立開業から1年も経たない1995年1月17日、阪神・淡路大震災が起きます。神戸市内の自宅は電気・ガス・水道の全てのインフラが止まり、家族は私の実家がある和歌山に避難。神戸の街は壊れ、神戸弁護士会館は避難所となり、しばらくは「仕事」が全くない状態になりました。私は50ccバイクを購入して街を走り、簡易机に法律相談の紙を貼って、相談業務に明け暮れました。ところが、そこに法律の相談はなく、ただひたすら被災した人の話を聞き「一緒に頑張りましょう」「とにかく生きていきましょう」と言う毎日でした。まさにそのとき、弁護士としての原点を得たのです。

弁護士として普通の人たちの幸せをきちんと守るのが使命だったのだと気づき、「事件」が終わったらいなくなってしまう専門家ではなく、責任をもった「ことば」を発する専門家である弁護士こそがここ神戸にも必要なのではないかと考えるに至りました。街ごとが被災した阪神・淡路大震災という壮絶な体験に、出身地とは無関係でも、その地域と一緒に生きていこうとする地場産業たる法律事務所の実現を目指すことを教えられたのです。自分の技を世に問いたいという個人的欲求から、目指すべきところがもっと社会へと転化した瞬間でした。

2020年より新型コロナウイルスによるパンデミックにより、社会は大混乱状態になりました。しかし、この災禍によって移動や事業が制限される中で、人と人とのつながりの大切さ、自然への敬意など、あらためて気付かせていただくことも多くありました。いつの時代においても、地域で活動している法律事務所を実現するために、時代の流れのなかでも、弁護士に求められる本質的な部分を常に追求しながら、いつまでも変わらぬ思いをもって経営していきたいと考えています。

弁護士法人 神戸シティ法律事務所 弁護士 井口寛司



理 念

喜びと笑顔に 出会うために

1. 私たちは、社会正義の実現に貢献します。
2. 私たちは、^{ひと}人間と^{こころ}心を大切にします。
3. 私たちは、本質と品質を追求します。
4. 私たちは、自立と協働を確立します。
5. 私たちは、挑戦と進化を続けます。

2003年6月5日制定

略 歴

- | | |
|------------|--|
| 1962年4月 | 和歌山県日高郡川辺町にて出生 |
| 1985年(22歳) | 中央大学法学部法律学科卒業 |
| 1986年(24歳) | 司法試験合格 |
| 1989年(26歳) | 最高裁判所司法研修所において2年間の修習を修了(41期)
神戸弁護士会(現・兵庫県弁護士会)において弁護士登録 |
| 1994年(31歳) | 独立して「井口法律事務所」を開設 |
| 2004年(42歳) | 「弁護士法人神戸シティ法律事務所」へ組織変更
甲南大学法科大学院 教授 |
| 2009年(47歳) | 事務所創立15周年記念講演会(神戸商工会議所) |
| 2014年(51歳) | 事務所創立20周年記念講演会(ポートピアホテル)
ミャンマーデスク創設 |
| 2019年(57歳) | 「指定管理者制度 問題解決ハンドブック」(共著)出版 |
| 2022年(59歳) | ㈱日本政策総研理事に就任し、新たな道を歩き出す |
| 2022年7月3日 | 60歳にて旅立つ |



弁護士 高島 浩

他の人の幸せを周りから支えるのが本当の幸せなんだ

「自分が幸せな瞬間を想像したらどんな絵になる？」

昼食を終えて事務所へ戻る道すがら、井口先生からこのように問われたのを覚えています。

「そうですね。難しい案件で勝訴して喜んだり、家族と公園でゆっくりしている光景ですかね。」このように答えた私に対し、井口先生は次のように教えてくれました。

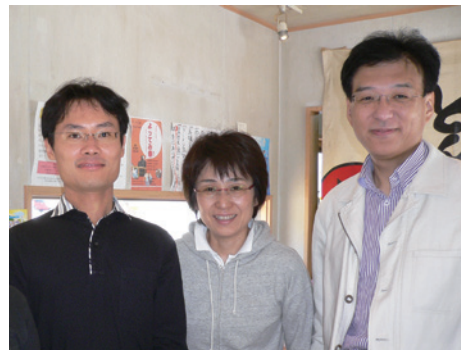
「自分がその絵の中心に居てはいけない。他の人の幸せを周りから支えるのが本当の幸せなんだ。」

右脳が発達していることを自負する井口先生の口から次々と語られるイメージの中には、正直、私も正しく理解できていると自信の持てないものもありました。しかし、この時井口先生が語られた言葉のイメージは私の中にスッと入ってきました。

超サービス精神というか、超献身的というか。井口先生には微塵の私心もなく、その目指す先には常に周りの人の幸せがあったのだと思います。

依頼者の笑顔のため。事務所メンバーの幸せのため。井口先生の思い遣りに満ちた言葉は優しく（私心のある凡人にはときに厳しく）、とてつもなく熱いエネルギーを発していました。そしてそのエネルギーの恩恵をずっと享受していた一人が私でした。

私が初めて井口先生とお会いしたのは20年前。私が就職の面接を申し込んだところ、「どんな奴が来るのか見ておこう」と逆に井口先生が私の修習地・奈良まで来られたのです。私の結婚式では替え歌披露を含めて30分スピーチいただき、子供が生まれた時にはお祝いに立派な木の椅子を持って電車で私の自宅まで来ていただきました。事務所でも、事案の本質を捉え、相談者を元気づけ、背後にあるより大きく根本的な問題まで解決していく姿を見ながら20年間薫陶を受けてきました。



「自分が何をできるかではなく、相手が何を求めているかを考える。」
「自分がハブとなり、他の専門家の力も集めて徹底的に考える。」
「最高の形で解決する。それを続けるのが弁護士の営業。」

もう井口先生に感謝を伝えることは叶いませんが、日々のご依頼やご相談を受ける中で、井口先生ならこの事案をどう捉えるだろうか、井口先生ならどのような解決の形をイメージするだろうかなどと、いつも考えながら事にあたっています。

「なかなかやるじゃないか。」
天国からそう思っていただけにように努力を続けます。

弁護士 中馬 康貴

そこに正義はあるのか

私が弁護士になって間もない頃のことです。依頼者にも落ち度がある訴訟案件で、裁判書面を井口先生に見ていただいたことがありました。このとき、井口先生から「中馬君。この案件、正義は依頼者にあるの？」と問われました。私の書面がいかにも弱気な内容になっていたのです。

私はハツとして、たどたどしくも依頼者にも正義はあることを説明しました。すると、井口先生は私の肩を叩き「それを書面にすればいいじゃないか」と言ってくださいました。私は、このときの井口先生の眼差しが忘れられません。私の目をまっすぐ見て、つたない私の説明を真剣に、正面から受け止めていただいたのです。



僕はいつもマジンガーZの操縦席に座っている

交渉に苦手意識を持っていた私に対し、井口先生は「僕はいつもマジンガーZの操縦席に座っている」とアドバイスされました。

マジンガーZの姿が思い浮かばず、私がぼかんとしていると、井口先生は「平田君は不安になったらすぐ顔に出る。それは平田君がそのまま弁護士平田として話をしていくからだ。」「僕は交渉のときはいつも操縦席に座って、そこから弁

護士井口がどう話したり反応したりするのがベストかを考え、弁護士井口を操縦しているんだ。」と解説されました。

井口先生は、ご自身の姿が相手にどう映るのかをよく研究され、しぐさや表情にまで神経を張り巡らせておられました。

いつか「私も操縦席に座りました。」と井口先生にご報告できるよう、挑戦を続けます。

弁護士 平田 尚久

弁護士をなめるな

私が司法修習を修了し、神戸シティ法律事務所で弁護士として働き始めて半年がたったころ、ある案件でミスをしたことがありました。私は、先輩から頼まれたことを、特に深く考えずに実行しようとしたのですが、事務スタッフから問題点を指摘され、ミスに至らずに済んだのです。

その報告をした際、井口先生から「弁護士をなめるな」とお叱りを受けました。弁護士は、全ての業務を自分の責任で判断し、実行しなければならない。弁護士は、それほど重い責任を負う仕事なのだということを自覚しなければ、弁護士として仕事をしてはいけないと教えていただきました。



私は、会社員としての勤務経験を経て弁護士になりましたが、会社で働く中で、上司からの指示を受けてその通りに動くということが意識の中に染み付いていたようです。社会人としての経験はある程度積んでおり、弁護士の仕事もそれなりにこなせると思い込んでいたところもありました。そのような意識が残っていることを、井口先生に見抜かれていました。

弁護士としての経験を積むにつれ、この仕事の奥深さや責任の重さを一層強く感じるようになり、当時の自分がいかにこの仕事を「なめて」いたのか分かるようになってきました。それも、あの時、井口先生にこの一言をいただいたおかげであると感謝しています。これからもこの言葉を忘れず、自分に言い聞かせて、弁護士としての仕事に励んでまいります。



自分の意見を持つこと、そしてソリューションであること

私が井口先生と同席させていただいた法律相談後の回答案を作成した際に頂いた言葉です。
私の作成した回答案は、関連する判例と判断のポイントを紹介し、自身の意見をぼんやりと述べるにとどまり、解決の指針を示すものには到底至っていませんでした。

しかし、井口先生から頂いた言葉をもとに、依頼者が何のために相談に訪れたのかを想像し、それに対して弁護士が提供できる価値というものを考えたときに、弁護士が提供できる価値は、単なる法律論に基づいた回答よりも、むしろその問題を解決する指針の提示にあるのだと実感し、そのことを常に意識して日々の業務に取り組んでいくことになりました。

弁護士としてのあるべき姿を目指していく上での正しいスタートラインに立つことができたのは、井口先生から頂いた言葉のおかげです。

弁護士 福永晃一

「種を届ける」 (2022.3.23 井口寛司)

「種を届ける」の「種」って何か。
「希望」なんです。「希望」を届けるんです。「希望」をみなさんに届ける、ってということなんです。
「たとえ明日 世の終わりが来ようとも 今日 私はリンゴの木を植えよう」
今日を精一杯生きる。

希望を届けられる専門家

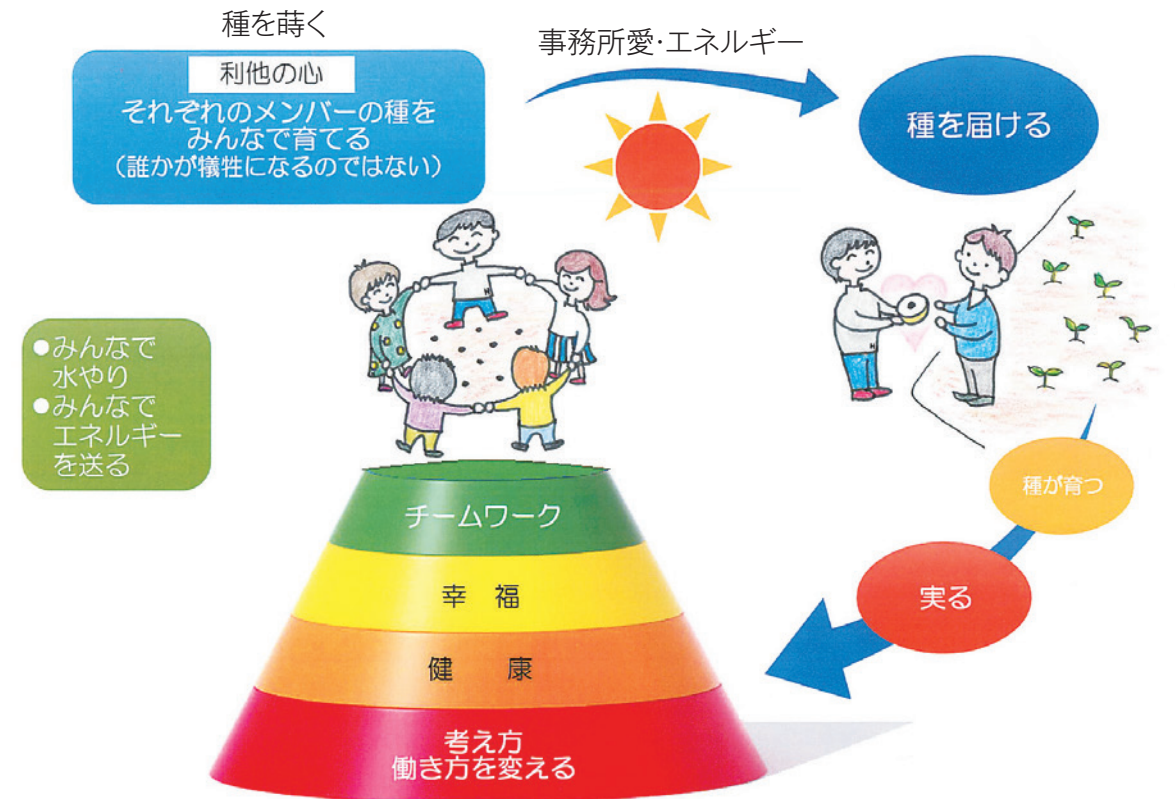
「希望」ってどうやったら届けられるか。渡す人が「希望」を持っていないといけない。
弁護士は論理的思考力により、最高裁判例、評釈、条文を調べるが、自分で、無理だとなり、八方塞がりとなる。
希望を無くした専門家(弁護士、医師)が依頼者、患者に渡すものは消極的、免責的。難しいです、ということとなり、希望のない、エネルギーのないカスとなる。
受け取るものがない。
希望をもった話は、この件は解決できる、安心してください、一緒に頑張っていきましょうよ。
それは判例や論文からは生まれえない、周りの壁をどう見ても希望は生まれえない。
その事件を高い視点から見る。
どんな価値と価値がぶつかり合って、これまでの判例が法的保護に値しないと言って請求を棄却してきたのか。
ベースとなる社会の価値観が変われば、最高裁の価値判断も変わっていく。
「これまで無視されてきた価値」に気づく。
上を見れば青空が広がっていて、差し込む光があるはず。壁を見ている。
その希望の光を弁護士は、専門家は見つけていかなければならない。
まだまだ解決方法がある。そうした希望が入ったお話を届ける、ということです。
そうすると希望が入ったお話(種)はエネルギーに満ちているので、育っていくわけです。

MINAMATA

ニュースレターでMINAMATAのことを書いた。チッソの社長は水俣病の被害をppmだと切り捨てた。
しかし、そのppmとされた価値は、現在、SDGs、人権、地球環境。大きな価値となっている。
公共の福祉を笠に着て、高度経済成長期において、人権侵害はやむを得ないとされてきたが、価値転換が起こっている。
どうやったら希望を届けられるか、ひたすら勉強するしかない。
常に、上述の思考回路を作っていく。
自動販売機型ではない。希望を届けられる弁護士・専門家は硬貨を入れたら、100円のジュースではなく、なんとキラキラ光るものが出てくる、依頼者にはかけがえのない種となる。

種を育む

種をみんなで育てていかなければならない。種が希望だとすればその希望をみんなで育てていく。
みんなで希望を育てていく事務所ってどんな事務所？
毎日のこと。
朝、「おはようございまーす」と言って入ってくると
これに応える「おはようございまーす」があれば。
相手が全然見ない、PC見たまま、「おーっす」というだけ、では希望は生まれえない。
恵み、楽しさ、嬉しい、喜び、幸せを感じる、そこから希望が生まれてくる。
弁護士同士の他愛もない会話。それは情報共有でも、情報伝達でもない。しかし、会話をした後、「また頑張ろ」となる。
そこに希望が生まれている、種が生まれている。
そういう会話があちこちでなされて、希望が生まれていく、事務所の一人ひとりが希望を持っていないといけない。
しかし人間は弱い。悲しみ、哀しみ、妬みなどなど、負の感情が。
「希望に満ちた言葉」を交わしていると、生きる希望、仕事をする希望が生まれ続けていく。それがいいエネルギーとなって事務所の中で循環を始めると希望にあふれた人たちがいる事務所となる。
チームワークってそういう意味。決して誰かの指令に他の人が従う、ということではない。情報の共有、伝達を超えて、人生の希望をそのチームの中に届け、蒔いていく。
希望はあふれる、希望のチームワークができる。



利他の心

早く、希望を、エネルギーを。届けたくて、ワクワクしてくるはず。
少しでも早く、その希望をエネルギーを、会社の相談でも希望を届けたくて。
愛に溢れた希望のチームワーク。誰かが犠牲になるのではない。
チーム内でも、弱い心が出ても、希望をもらうことができる。
玄関を開けた途端、「気」(エネルギー)が溢れていけば、依頼者は人間で、人間は動物なので分かる。
これが利他の心。

健康、幸福、働き方

健康、幸福、働き方、と書いているが、一人ひとりが幸せで、健康でないと。
あればそれを事務所内で分かち合う。
健康、幸福、素晴らしいチームワーク。
みんなで水やりをして、みんなでエネルギーを送る。

DXって何か。
その希望を育てる前提となる事務所のメンバーの個々の幸せを考えていくということ。
それぞれ事情を抱えている、各人の個性を大事にする。
多様性をインクルージョンしていくための手段。
子育て、介護。
保育園のおむつや布団とともに紙の重たい記録を抱えるとなると限界を超える。熱出せば休み。
PCひとつで事務所と共有して仕事ができれば、その人の幸せが一步実現できる。
色んな事情を抱えた人も仕事を続けられる。
大切なインフラ。色んな人を巻き込める。
色んな種を育てていける、愛の溢れる重要なインフラ、ツール。
早くその基礎を整えたい。

希望のエネルギー

種を蒔く、事務所愛・エネルギーとして種を届ける、
希望が実って、また事務所に戻ってくる。
エネルギーが、希望が戻ってくる。
これが所員の物心両面の幸福を実現する事務所である。

弁護士 高橋 弘毅

手から鳩を出すのが楽しい

どのような難問が持ち込まれても、井口先生は、常に受け止め、ポジティブに「どうすればできるか」と解決策を模索し、人が思いつかないような解決策を編み出されていました。そして、一枚の絵画を描くようにそれをホワイトボードに書き出し、分かりやすく説明すると、その場に希望の光が灯り、相談に来られた方は笑顔になり、「来て本当に良かった」と言って帰られる。私は、舌を巻いてそれを見ていました。

「手から鳩を出すのが楽しいんだ」「僕を乗せてくれると、もっと出てくるよ」。井口先生は、そのように言われた後、「でも、僕が目指すところは、手から鳩を出すこともなく、相談に来られた方が、目の前に座った僕の顔を見た瞬間に、解決しました、ありがとうございました、となることなんだ」とも言われていまし



弁護士 稲田 優

「私が考えているコンプライアンス基準、それは、うちに帰って、今日、自分がしてきた判断を、自分の子どもに自信をもって語れるだろうか。将来の子どもに、今、していることを自信をもって語れるだろうか、それが簡単な基準であり、もっとも明確な基準であると考えているわけです。」

私は、いまから18年前、甲南大学ロースクールの教授と学生として、井口先生と出会いました。当時の印象は、「笑顔だけれど、目の奥は笑っていない怖い



た。それを聞いて「そんな馬鹿な」と笑ったものですが、先生が亡くなった翌日、事務所に相談に来られた方が、開口一番、「(井口先生の事務所に) 元気を貰いに来ました」と言われていました。もう実現されていたのではないのでしょうか。

これでもか、これでもかとやらないと動かないよ

依頼があると、井口先生は、これだ!と思った手段を全て尽くし、解決していきました。書籍や裁判例を調べ尽くすのは言うに及ばず、ある時は現場へ行き、ある時は専門家に教を請いに行き、必要があれば連れてくる、またある時は関係者間の調整を行うなど。相手に何かを伝えるときも、タイミングや表現を、相手の受取り方とその後の展開を計算し尽く

先生」というものでしたが、その眼差しは、それだけ真剣に、私たち学生と向き合ってくださっていた証だったのだと思います。

人に何かを「伝える」、まして「教える」ためには、受け手の何倍もの

して決めていく。私が「そこまでする必要がありますか?」と尋ねると、「これでもか、これでもかとやって、ようやく、人は、物事は動くんだよ」とサラリ。指示どおりに動くと、必ず結果が付いてきました。「ほら、やって良かったでしょ?」。その通りでした(大変でしたが)。

みんなの天井を開けてあげるのが僕の仕事

井口先生がこれだ!と思ったときに行動するのは、依頼ごとに限りませんでした。突然、「●●と一緒にいかないか?」と誘われ、何かと尋ねると、「ここ面白いと思うんだ。話を聞きに行ってみない?」。「え、ええ」と答えるとすぐにアポをとられ、付いて行くと、確かに面白い。伝手もなく行くので、いつも先方は、最初、なぜ神戸から?弁護士が?と一様に怪訝な顔。しかし、最後は、よく来てくれましたとがっちり握手。常に何かの収穫があり、世界が広がりました。海外にも足を運び、上海、ベトナム、ミャンマー。初ミャンマーは、事務所からは井口先生と私の2人で行きました。「行って良かったでしょ?」。本当にその通りでした。

出会ってから15年間、このような事の連続でした。追いかけても影を踏むことすらできない人、本物の弁護士と出会うことができたことは、人生最大の幸運です。教えていただいたこと、伝えていただいたこと。これからは一人で、みんなで実践していきます。

理解とエネルギーが必要となるものですが、井口先生は、常に考え抜き、一切の妥協も出し惜しみもされることはありませんでした。特に、研修を担当される際などには、「自分の話す言葉を全部書き出してみるんだよ」と、一つ一つの言葉を丁寧に選んでおられました。

そして、難しい概念こそ、伝えたい重要なメッセージこそ、わかりやすく、耳にしたその瞬間から実践することができる程に、ストンと落ちる言葉で表現されていました。

弁護士 二宮 淳次

ありがとう

あるとき、井口先生が私に向かって凄い勢いで歩いてくるので何事かと思ったら、満面の笑顔で一言「ありがとう」とおっしゃいました。井口先生は、弁護士に対しても、事務スタッフに対しても、誰に対しても、どんな些細なことであっても、「ありがとう」と感謝の気持ちを常に口にされていました。

その姿勢について井口先生に伺ったところ、「当たり前のことを当たり前にする、みんな気持ちよくなる。感謝の言葉だけではなくて、ビルで見かける人、コンビニの店員さん、みんなに興味をもって声を掛けると、みんな笑顔になる。僕はいつもそうしてる。この前、外国人観光客の団体がい



て先頭を歩く人が持っていた旗の先端にカエルが付いていたから、カエルと旗を指さして『フロッグ、フラッグ』と言ったら、外国人観光客も笑ってた。おもしろいやろ。やってみるもんやろ。君たちも、もっともって世の中の人に興味を持ったらいい」とおっしゃっていました。

当たり前のことを当たり前にすることは時として勇気のいることですが、井口先生が楽しそうに話しておられた姿を思い出しながら実践していきます。



弁護士 井口 奈緒子

「感謝」「謙虚」「勇氣」

私は、保育園の頃、将来なりたい職業について聞かれたとき、両親の影響から「弁護士!」と答えていました。周りの同級生は、「ケーキ屋さん」「お花屋さん」と言っている中で、何もわからないうまま、ただそう答えていました。そのときのエピソードを父はいつも嬉しそうに語ってくれました。司法試験受験については苦労した私でしたが、父は誰よりも私のことを信じてくれました。私がくじけそうになっても、父は決して私を信じることをあきらめませんでした。「落ち着いてしっかりね」「自信をもちなさい。きつと大丈夫。」そして合格したときは、私の前で泣いたことがなかった父が、初めて涙をこぼして喜んでくれました。あの日のことは一生忘れません。



井口先生は、何をやるにも真っ直ぐで、真剣で、一生懸命でした。いつも周りを気遣っていました。「事務所経営も、後輩の指導も、すべて、僕は命懸けでやってきた。」そう言っていました。井口先生は、みんなの井口先生であると同時に、私にとって世界でたった一人の父親です。一人の人間として、弁護士として、あるべき姿を、常に言葉や背中であらわしてくれました。「感謝」「謙虚」「勇氣」の3つの言葉は、それを表す言葉です。周りへの「感謝」の気持ちを忘れず、常に「謙虚」な心で、「勇氣」をもって堂々といきなさい。そう言っ、あの「ニコニコ笑顔で今も見守ってくれていると思います。」 私たちは、「弁護士 井口寛司」そのものになることはできませんが、その遺志を継いで、次の時代を生き抜いていくことはできると確信しています。

標記の言葉は、10年以上前のコンプライアンス研修での一節なのですが、私の父が「職場で、井口先生のお話をうかがってきた」と嬉しそうに教えてくれたもので、いまでも父と私の行動原理になっています。

10年振りに事務所に復帰した後も、「頑張れ!」「もっと踏み込め」と先生からの叱咤激励を受け続けた私ではありますが、少しでも先生の境地に近づき、「井口先生の教え子です」と胸を張れるよう、努力し続けたいと思います。

弁護士 石橋 伸子

とにかく勉強が好き

「司法研修所には24歳で入所しました。湯島天神の北側にあった司法研修所に入った時の感動は今でも忘れません。木々がうっそうと茂る岩崎弥太郎の旧邸です。ここで460名余りの司法試験合格者と一緒に勉強ができる。こんな素晴らしい環境はないと思って勉強に励みました。本当に楽しかったです。永井ゼミの勉強も司法試験の勉強も楽しかったですが、司法試験に合格した後の勉強はそれ以上に楽しいものでした。」

（「法律事務所経営においてなぜ弁護士に哲学が必要か」2022年5月 井口寛司）

この未完の原稿には、とにかく法律の勉強が好き、楽しい、というのが何度も繰り返し出てきます。雇用機会均等法施行前で、四大卒の女子には就職口がなかったため、私は、ある意味、社会に出ていくためのツールとして法曹の道を選んだところがあり、東京の司法研修所に入ったとき、まずは「びあ」

を購入して東京見物をしようとしたのですが、それとは全く異なる、勉学に燃える修習生がいたのです。それが井口さんです。井口さんは、法律の勉強そのものが楽しくてしょうがなかった。これは間違いなく、その後の「弁護士 井口寛司」の人生の出発点となりました。



創造的な仕事

「経営者ガイドライン」を20年以上も前に先取りしていました。

「法律は、人間の都合で作ったものでそれに当てはめて、そのほか、を切り捨てているだけ。本当に切り捨てていいのか、を考えるべきだ」

「捨象されているところに、大事な価値があることを見出すことが弁護士には必要だ」

「経営者ガイドライン」の施行前、弁護士が会社破産の依頼を受けたら、その社長さん個人の破産も当然のように受任して申立てをしてきたものです。しかし、井口さんは、弁護士1年目から、会社破産の依頼を受けてもほぼ全件、社長個人を破産させませんでした。社長個人の自宅は残すべきだと言って、そのために色々な方策を講じて、実現していききました。

見えないものを見る

「…私は被害者からていねいに話を聞き取ることに努めました。自宅に上がり込んで、あなたにとってこの交通事故は何だったのか、解決はどういう意味を持つのか、そういった話をするうち、そこに一つの調和や共有空間が生まれることに気づきました。俺も解決したいんだ、私も解決したいんです、そんな声が聞こえてくるようになったのです。こんな体にしてしまった加害者を許すことはできん、しかしここから早く脱したいのも事実なんだ、そのために人生の局面を変えたいんだ。訴えとも取れるような言葉に出会うことが往々にしてありました。」

（「法律事務所経営においてなぜ弁護士に哲学が必要か」2022年5月 井口寛司）

法律と言えば、要件と当てはめと結論、ですが、井口さんはそれだけでは聞こえてこない、見えてこないものを見て、聞くという、独特の交渉術、解決策を見出してきました。最近では、「自分についても、相手方についても、それぞれの立場を取り去って、透明になってピュアになれば、分かるんだ」とも表現していました。

静かに、静かに、目を閉じて、耳をそばだてて聴くと聞こえてくる、という感じではないかと思えます。

相談の際、これを意識してやってみると、要件・効果論だけでは見えないものが見えてきて、相談に来られた方も、相談を受ける私との間で、納得感をもって、過程と結論を共有してくださるようになっていきます。

種を届ける

「種を届ける」の図は2021年4月、井口さんがそのイメージ図を手書きしたものを、絵心のある事務スタッフと弁護士がPCで仕上げたものです。井口さんは、その翌年である2022年4月に、我々に対してその絵解きをしてくださいました。

（「種を届ける」の図は7頁に掲載しております。）

「種」とは「希望」である。専門家が免責的に言う「できない、難しい」は、エネルギーのないカスだ、絶望だ。と言っています。受け取ったところで何も生まれない、と。法律を徹底的に検討考察することはもちろん、その次に法律を超えたあらゆる価値を勉強して、高いところに視点を持つことにより、絶望を届けるのではなく、希望を届けることが可能となる。いつも弁護士はものごとを捨象し、当てはめ、その結果として、絶望を渡しているのではないかとppmを切り捨てない。そのためには常識を超えて考えてみる。と言っています。

井口さんは弁護士って何なのか、専門家って何なのか、を考え続けました。結果、専門家に非常に厳しかった。

専門家というのは一種の権威的存在でもあります。権力や権威にもおかしいと思えば、全力で抗していきました。

NHKのプロフェッショナルの最後に問われる「プロフェッショナルとは？」



思いきり幸せになつていい

他者の幸せのために自分の全てを投げ出してきた人が、この言葉を書いて自分の幸せって何なのかを考え始めていました。自分は身体を無視してきてしまった、身体に申し訳ない。身体とともに幸せになる旅を始めようとしていて、事務所のみんなにも健康経営を実践して欲しいと言っていました。

専門家に厳しい、は所内の弁護士にも厳しい、でしたが、一方でいつもいつも我々を励ましてくれました。我々が井口さんを励ましたことはあつたのか。忸怩たる想いです。

あまりにも全力で、あまりにも速く、物凄いエネルギーを放出しながら駆け抜けた60年。

たくさん種を届けてきたと思います。

我々は、井口さんがもう一つの種は、個性、と言っていた、その個性を活かしながら

井口さんに受けた薫陶を大切にしっかりと歩んでまいります。井口さんは我々の心の中で生きています。ありがとうございます。

井口さんは、闘病中のお正月に、書初めで「思いきり幸せになつていい」と書き、転地療養に行った先で摘んできた、四つ葉のクローバーを押し葉にして、一緒に飾っていました。

